巻頭言
No.165

デジタル化時代の展覧会

大阪市立
東洋陶磁美術館　館長

出川 哲朗

学校教育の中には美術や音楽などの科目があるが、実際に芸術作品に接する時間が少なく、大人になってからは、鑑賞の対象としての非日常的なものとなってしまう。そして芸術作品を所有したり制作したりするのは、一般の人たちにはほとんど関係のない世界の出来事となる。また芸術鑑賞が個人の趣味の範囲内に留められてしまっていることによって、芸術作品の社会的な意義が分かり難くなっている。

展覧会に行く、音楽を聴く、あるいは演劇や映画などを鑑賞するといった芸術作品の享受は、娯楽とみなされることもあれば、人生を豊かにし教養を高めるための自己研鑽にもなる。美術や音楽は人類の長い歴史のなかで積み上げられてきた芸術文化であり、成熟した社会にはなくてはならぬものである。尤も芸術の概念自体も時代によって変遷し、また、芸術作品が特権階級の独占物ではなくなり、一般市民がそれを享受することが現代の社会全体において重要となってきている。

芸術作品によって思考が活性化され視野が広がるとともに、自由な発想が醸し出される。優れた芸術作品はまた、人々の心を励まし、勇気づけ、元気にする。これが精神だけでなく身体の健康にもよい影響を及ぼすことが知られている。従って、芸術作品にアクセスするハードルが低ければ低いほど豊かな社会といえる。

芸術作品へのアクセスの方法は、高度情報化社会になって一挙に広がってきている。展覧会やコンサートの開催情報がインターネットによって即時に分かり、実際に展覧会場に出かけることも、Ｗｅｂ上にあるコンテンツとしてバーチャルで楽しむこともできる。既に音楽についてはかなりデジタル化が進み、バーチャルでも享受できるのが一般的になっている。

美術については、展覧会は美的体験の場である美術館で開催する形式は変わらなくても、展示が困難な貴重な作品を超高精細の映像として展覧会の構成の中に組み込み、展覧会のストーリーを分かり易くすることも可能であろう。勿論、展覧会の会場では本物のオーラのない複製品による展示は行われるべきではなく、美術館ではあくまでも本物だけを展示することで、観客は芸術世界に安心して没入することができる。

将来、美術館で現実の展覧会が催されると同時に、配信による展覧会映像も共存していくだろう。デジタル化された映像が高精細でかつ没入感があれば、それをモニター上で鑑賞し、いつか実際の作品を見に世界各地の美術館を訪れようとする人もいるだろう。Ｗｅｂ上の展覧会であっても優れた内容の映像ならば、美的体験が十分可能となるであろう。バーチャル技術が更に進化し、「バーチャルな美術館訪問」が可能になれば、芸術は限りなく身近なものとなるとともに、展覧会は世界中から選別され、デジタル化された展覧会としての質の高さが要求されることになる。既に世界的に著名なコンサートや舞台が配信されているように、展覧会もまた技術の革新によってバーチャルで共有することが目前となっている。そうすれば、芸術に疎遠であった人々でも、質の高い芸術作品の享受が容易になる。このときこそ、芸術作品の社会的な意義がますます重要になってくるであろう。

出川 哲朗（でがわ てつろう）

1951年島根県松江市生まれ。
大阪大学基礎工学部物性物理学科を卒業（統計力学を専攻）。
大阪大学文学部美学科に入学。美学専攻。大阪大学大学院文学部芸術学専攻。
西宮市大谷記念美術館学芸員、大阪市立東洋陶磁美術館学芸員、学芸課長を経て、2008年より大阪市立東洋陶磁美術館 館長となり、現在に至る。